



洋上アルプス

No.272 平成29年11月5日

発行
林野庁屋久島森林生態系保全センター



バックナンバーや屋久島国有林における入林許可申請等様式のダウンロードはこちらにあります

http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL0997-42-0331 FAX0997-42-0333



原田九州森林管理局長が来島 10月4日～6日

平成29年7月10日付けで九州森林管理局長に就任された原田隆行局長が屋久島の現況を視察されました。

初日は、土埋木生産現場や安房貯木土場の状況及び地元製材工場等を視察されました。5日には、世界自然遺産地域を含む縄文杉登山ルートを視察され、平成29年度に実施する縄文杉ケーブリング等の撤去作業、周辺の保全対策等について説明を受けられ、今後の保全対策等について指示を頂きました。

6日には、西部林道の垂直分布及びヤクシカ被害状況等を視察され、最後に、屋久島町への表敬訪問及び屋久島町役場木造新庁舎建設箇所等を視察されました。



西部地域のヤクシカ被害状況について説明
(中央:原田局長)

高校生が毎木調査を体験 10月7日

大分県立大分舞鶴高等学校の理数科1年生14名が、「課題研究スキルアップ基礎研修(屋久島体験研修)」の一コマとして、宮之浦川上流の国有林で森林植生調査の基礎となる毎木調査等を体験しました。

調査は、スギ人工林とアブラギリ主体の天然生林のプロット内(10m×20m)の樹木について、樹高測定班、胸高周囲長測定班、樹木位置測定班に分かれて行いました。慣れない測竿上げと樹高の読み取りに大変苦労している様子も見られましたが、当センター職員の指



毎木調査の1コマ

導も得ながら下層植生の優占度調査まで実施し、「森の中は新鮮でメッチャ楽しかった」との感想もありました。

調査後、世界自然遺産地域の優れた自然景観や特異な生態系等を将来に渡って維持していくためには森林の植生調査等が重要であることや、今回の調査対象とした外来植物アブラギリが生態系に及ぼす影響等について学習し、今回の研修のとりまとめの参考となるよう意見交換を行いました。



センター会議室での講義

森林・林業の技術交流発表大会 10月17日～18日

熊本市において「森林・林業の技術交流発表大会」が開催され、屋久島森林管理署及び当センターから2課題を発表し、当センターが優秀賞を受賞しました。

■地域住民のニーズを取り入れた海岸防災林造成へ向けた取組み

(発表者：森林技術指導官(植薄)・技官(富田))

種子島の海岸林は防風・防潮等の重要な役割を担っています。しかし、松くい虫の被害や近年の異常気象により機能の低下が懸念されています。そこで、海岸林の現況調査や地域住民への意識調査を行い、今後の海岸防災林の管理保全について発表を行いました。

■動物の五感のうち、味覚・臭覚・聴覚・視覚の四感を複合した、ヤクシカの誘引手法等の検討について (発表者：生態系管理指導官(渡邊)・技官(三國))

ヤクシカの増加は農林業や生活環境被害、生態系被害等をもたらし深刻化しています。当センターでも職員による有害鳥獣捕獲を実施していますが、捕獲効率の低下等に苦慮しています。そこで、動物の味覚等の四感を複合した誘引手法や忌避物質の検証等を行い、その結果について発表を行いました。



写真上から屋久島森林管理署と当センターの発表

屋久島世界自然遺産地域連絡会議幹事会 10月19日

世界遺産地域を適正に保管理していくための関係行政機関(環境省、林野庁、鹿児島県、屋久島町)による幹事会が行われました。各機関よりH29年度の取組状況等が報告され、屋久島町より「屋久島山岳環境保全協力金」について、入山者の約8割から協力頂いており、「登山者の安全・安心」のためにわかりやすい形で協力金を使っていくことや、林野庁より大王杉の樹勢回復診断を11月下旬に予定していることなどが報告されました。



幹事会の様子

アサヒビール協定式&ボランティア 10月13日, 14日

屋久島町役場本庁で、屋久島レクリエーションの森保護管理協議会とアサヒビール(株)との間において、「レクリエーションの森の整備・管理および活用に関する支援協定」の調印式が行われました。本協定は、ヤクスギランド、白谷雲水峡など屋久島レクリエーションの森において5年間、資金と労務を提供する内容となっており、平成20年8月に初回が締結され、今回3回目の更新協定となっています。



レク森活動推進に向け両者固い握手

調印式では、アサヒビール鹿児島支社・星野大作支社長と屋久島レク森協議会会長代理の岩川浩一副町長双方協定書に調印の後、星野支社長より「これまで10年間、屋久島の自然を守る手伝いをさせて頂きました。これからまた5年間、活動が出来ることを非常に嬉しく思います」と挨拶。



悪天候にも負けず参加した皆さん

翌日には、小雨の中を協定に基づくボランティア活動をヤクスギランド内で実施しました。これまでで最大の参加者総勢70名が7班に分かれて、遊歩道の苔落としの清掃作業を行いました。参加者が汗だくになりながら木道や手すりを磨いて頂いたお陰で、ヤクスギランドの遊歩道が見違えるほど綺麗になりました。

屋久島の蝶 (第4回)

— 唯一の北限の蝶：イワカワシジミ —

久保田 義則 (鹿児島昆虫同好会)

2005年以前、イワカワシジミは、日本では奄美大島以南に生息する蝶として知られていました。イワカワシジミの開張は♂:3.0~3.5cm、♀:3.5~4.0cm程度で羽根の裏面に特徴があり、♂♀とも光沢のない草緑色をしています(写真1)。

この蝶が屋久島に生息していることが2006年、独立した2人の蝶愛好家によって衝撃的に発表されました。吉田和久氏は「7月に平内で1♀を採集した。」、久保田正秀氏は「10月に鈴川で1♀を撮影すると共に採集に成功した。また、屋久島の複数河川沿いのクチナシに生息の痕跡がある。」と発表しました。

この蝶はクチナシに依存して生きています。春先に羽化した♀はクチナシの蕾に卵を産み付けます。孵化した幼虫は蕾の中に入り中身を食べます(写真2)。蕾で育ち羽化した蝶は、クチナシの実に卵を産み幼虫は皮を食い破って中に入り、中身を食べます。多くの場合、幾つかの実を食べた後、実の中で蛹化し、羽化します。このため、これらの幼虫が出入りした後には、穴があき、穴あきの実(写真3)を探すことにより生息していたことを確認できます。久保田氏の報告の直後、宮之浦川・永田川・栗生川・中間川・大崎川・二又川の川沿いのクチナシの実から生息の痕跡を確認出来ました。また、平内生活館付近・尾之間温泉付近・原や麦生の県道沿い・健康の森公園付近のクチナシには、川沿いより多い生息痕がありました。

この時を契機とし、春先や秋の蝶の生態調査・穴あきクチナシの観察や成蝶の採集などを通してイワカワシジミの調査を続けてきました。2006年のような広範にわたる発生は、その後ありませんが麦生~栗生間では、年によって発生数を増減させながら2016年まで継続して発生を確認しています。この結果から推測すると、イワカワシジミは、何時・どのような手段で屋久島にやって来たかは分からないものの2005年以前に既に棲みついでおり、2005年前後に何らかの条件が揃って大発生し、発見に繋がったのではないかと考えられます。この蝶の増加を阻む要因として①熟れたクチナシの実は橙色で目立ち、その多くがヒヨドリやメジロの餌として食べられること、②クチナシは成長が早い民家に近い所では、伐って除去されることが多いこと、などが上げられます。何れにせよ、2006年から2016年まで10年以上、定着していることからイワカワシジミは迷蝶から在来種に昇格し、屋久島にこれまでいなかった北限種が初めて誕生したことになります。(つづく)



写真1. イワカワシジミ 裏



写真2. クチナシの蕾の穴



写真3. クチナシの実の穴



屋久島の植物

ツタ (ブドウ科)

全国に分布する落葉性のつる性木本。壁や他の樹木によじ登っている。紅葉の美しい樹木の代表。ツタは古来、アマツラと呼ばれ、この樹液から甘味料(甘葛煎)が作られていた。清少納言も氷を削ったものに甘葛煎をかけて味わっていたのだろうか(枕草子「あてなるもの」より)。



屋久島北部等の植生垂直分布調査（平成27年度）

●標高1395㍍プロット（スギーハイノキ群集）

高塚山頂付近の尾根を挟んだ凸型斜面に設置。高木層はなく、亜高木層にスギのほか、シキミやユズリハなどの常緑広葉樹、ヒメシャラやコハウチワカエデなどの落葉広葉樹が生育。



プロット付近の概況

[結果概要]

高木層の生育は確認されず、亜高木層としてスギ、ヒメシャラなどが、低木層としてシキミ、ハイノキ、サクラツツジなどが生育する。また草本層としてサクラツツジ、アセビなどが生育するが植被率は低い。なお、アセビはヤクシカの不嗜好性植物である。

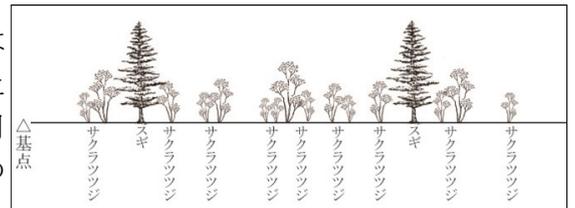
[草本層の変化とヤクシカ生息状況]

植被率は30%程度である。同一小プロット内の出現種を比較すると、種数が15種から24種と増加した。構成種を見ると、スギ、ヒメシャラ、コハウチワカエデ、ヤマグルマ等の亜高木層を構成する種の稚樹が今回の調査で新たに確認された。なお、これらの種の被度・群度は高くなく、またヤクシカの好きな植物種でもあることから、ヤクシカの生息状況によっては、今後減少または消滅のおそれもある。



[過年度との比較]

H22調査と比較すると、亜高木層、低木層については大きな違いはない。なおH17調査でヤクシカの採食圧により生育が危惧されていたリュウブについて、H22調査では5個体が確認されていたが、今回調査で1個体のみの確認であった。低木層のハイノキやサクラツツジの生育は変わらず旺盛であるが、草本層の植被率は低い状態であった。



群落配分図(横断面)



巨樹・著名木 屋久杉

しゃらの大杉

しゃらの大杉は、樹高14.3mと風の影響で背が低く、枝葉も上部にわずかに残っている程度。風当たりが強いため、台風13号（平成7年）により地上7m地点で折れてしまった。幹は空洞が大きく落下の衝撃で砕けている。

着生する木本類は、ナナカマドやヤマグルマ、シキミ、アセビ、タイミンタチバナなど。

- 樹高：14.3m㍍（折れる前）
- 胸高周囲：5.7㍍
- 樹齢：1600年
- 標高：730㍍
- 場所：白谷雲水峡 楠川歩道沿い（進入禁止区間）

参考文献：屋久杉巨樹・著名木 改訂版(H11.7)

